

GBカードがあるじゃないか！

倉敷市立西中学校 松本一郎

放課後、1年生の担任が、副校長先生のところへ慌ててやってきました。ちょうど、私もそこに居合わせました。担任は、「保護者から電話がかかってきました。助けてくださいと。」副校長先生が「何があったん？」と答えると、「大きな病院にお勤めのお母さんです。コロナで、現場が大変な状況になっていて、西中の生徒に応援のメッセージを書いてもらえないでしょうか？」という話でした。聞いた副校長先生は、「それは、済まんかった。もっと、我々がそういうことに敏感になって、積極的に先生方をお願いせんといけんかった。」と答え、それにもびっくりしました。

場の雰囲気は、一も二もなく、やるしかないという方向でした。若手の担任が、「何を使って、どんな形にしましょうか？」ときいたとき、副校長先生が、「西中には、GBカードがあるじゃないか！」と言ったとき、私の胸に感動が込み上げてきました。なぜ、そんな当たり前の言葉に、そこまで気持ちが揺さぶれるのか？と思われる人も多いと思います。なぜだと思いませんか。

ポジティブな行動支援(倉敷モデル)を支える行動理論の中の一つは、環境を調整することで、よい行動を増やすという考え方です。一昨年の7月から導入したGBカードには、GBカードのある環境を作るという大きな意味を、私は込めていました。GBカードのある環境では、それぞれの先生や生徒が、自分のやり方に合わせて、GBカードを活用します。すなわち、GBカードが

様々な意味をもって、やり取りされることになるのです。

例えば、私は、始めるにあたって、「GBカードは、よい行動に対するご褒美として、先生が書きます。」と説明しました。その職員会議では、教員の負担感が、生徒の不公平感を理由に語られました。私は、「ノルマも義務もない、やってみたい人はやってみてください。」と始めました。「うまくいっているなら変えようとするな。」の原則です。数か月で、3種類各1,000枚=3,000枚のカードがなくなり、3種類各1,000枚のカードを追加しました。

約半年後、令和元年度末の生徒アンケートには、「私たちも書くことができるカードを作ってください。先生からもらうだけではなく、私たちも書きたいのです。」という声が上がりました。私は想像もしていなかったアイデアを生徒からもらいました。先生が書くカードは、どんなに頑張っても限界があります。しかし、生徒が書くものは無限であると思いました。

世の中は、コロナで一斉休校になるころ、生徒が書くカードが完成しました。木造校舎に四季の木々をあしらい、タイトルも「ナイス・ビヘイビア」「ビューティフル・ビヘイビア」「ワンダフル・ビヘイビア」「ミラクル・ビヘイビア」としました。4種類各1,000枚=4,000枚を作りました。分散登校が終わり、6月になって全校登校が始まると、この4,000枚はすぐにはなくなりました。令和3年の2月までに、追加で8,000枚を印刷しま

した。これまでに、14,000枚を印刷したことになります。近日中には、新作「ナンバーワンカード」4種類各1,000枚=4,000枚が納入されます。

このカードは、行事の後に遣り取りされて教室に掲示されたり、受験する3年生への応援メッセージに使われたり、コロナ禍に奮闘する医療従事者への感謝のメッセージなど、何にでも使える万能のツールとなっています。このツールには、相手のよいところ、頑張っているところ、得意なところ、感謝やお礼などの言葉、あたたかい励ましや相手を勇気づけるメッセージが書かれます。GBカードという環境が、これらを引き出したとも言えます。

最近では、GBカードを活用している教員から、「GBカードは、ご褒美ではない。」という話も聞きました。では、何ですか？と問うと、「人間の尊厳を伝え合うメッセージカードです。ご褒美なら不公平感も出てくるかもしれませんが、私のクラスでは、もらった生徒にみんなが拍手を贈ります。」この雰囲気があれば、不公平感を克服できるかもしれません。

私は、令和2年～3年にかけて、西中学校には、ミラクル(奇跡)が実現していると思っています。14,000枚のカードを印刷しました。1枚が約10円ですから、約14万円になります。14万円でミラクル(奇跡)を実現することができるのですから、こんなに安いものは他にありません。

GBカードという環境さえあれば、いつでも、どこでも、だれでも、簡単に温かい学級をつくることができます。例えば、第1学年は、医療従事者への励ましのメッセージを書いて、病院に贈りました。コロナをめぐ

る誹謗中傷やいじめが社会で問題になっています。学校においても、PCR検査を受ける生徒も出てくるでしょう。陽性となる生徒も可能性はあります。そういう中で、「相手の気持ちになって考え、いじめをやめましょう。」と教員が説明しても、どれだけの効果が期待できるのでしょうか。

だからこそ、GBカードが効果を発揮すると思うのです。医療従事者の苦労を想像し、励ましのメッセージを書くことで、身近な人へのネガティブな関わりを防止する。さらに、ポジティブな関わりを促進する効果があるのではないのでしょうか。すでに、いくつかの病院から、感謝やお礼の言葉が届いています。それを、生徒に紹介する。生徒の自尊感情が高まり、それが、さらにより行動へのハードルを下げ、好循環を生むと思うのです。

GBカードがあるという環境、それが、「GBカードがあるじゃないか！」という一言に端的に表現されている。副校長先生だけが思っているのではなく、その場の教員がその言葉に共感する。西中学校のGBカードは、そこまで到達しているという感慨が、私の心に熱いものを呼び起こしたのです。

解決志向の中心哲学「もし、うまくいっているのなら、変えようとするな」の原則に反するかもしれませんが、西中学校の倉敷モデルは、生徒・先生のアイデアによって、ますますその真価を発揮する方向に、変容して行くことを期待しています。